

近畿方言の諸相

角 岡 賢 一

▶ キーワード

近畿方言、畿内、京阪方言、
旧国名

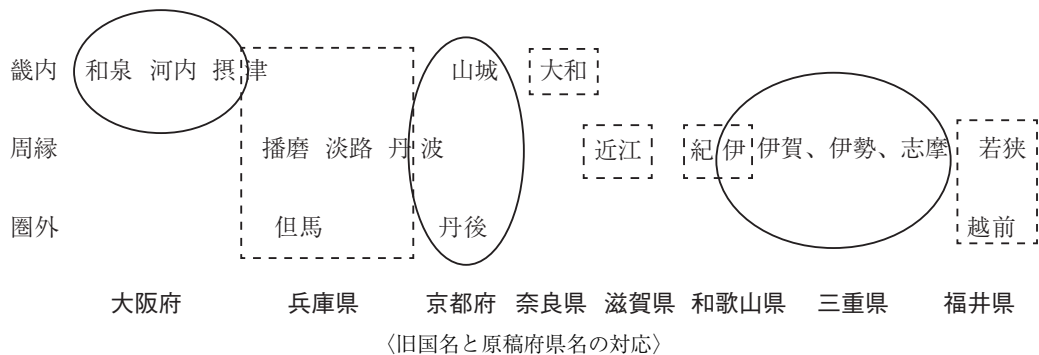
▼ 要 旨

This is a contrastive study of the Kinki dialects, covering seven prefectures which are the results of the redivision of the 17 states under the Tokugawa Shogunate regime. The most crucial idea in this paper is the concentric circles in the district: Kinai, consisting five states; the peripheral areas consisting nine states; the outer circle of Tajima and Tango. The criterion of the classification is the accent pattern, which distinguishes the lexicon with the pitch differences of high and low. Kyo-kotoba (Kyoto dialect) and Semba-kotoba (Semba dialect) are considered to be the core of the Kinai district. The farther from the distance from these cores, the greater differences of the phonological, lexical and syntactic phenomena.

第一節 はじめに

前稿「京ことばと船場ことば」(角岡 2024)では、京阪方言の核をなす二方言について比較対照を行ったが、本稿は対象を広げて近畿方言全体について言語学的諸特徴を分析する。前稿においても畿内五箇国を内心として、隣接する播磨、丹波、近江、紀伊というような周縁部と、近畿方言圏外となる但馬や丹後が同心円を描くという地理的状况を考えてみた。それが三頁の地図であるが、畿内－周縁部－圏外という三重構造が端的に示されているのは一種の驚きである。方言圏論を地図上に忠実に再現したかのような結果になっている。以下では、言語的にこのような三重構造がどう差異化されるかを検証するのである。

まずは明治維新時の廃藩置県によって区画された現行の府県と、旧国名を対応させてみる。



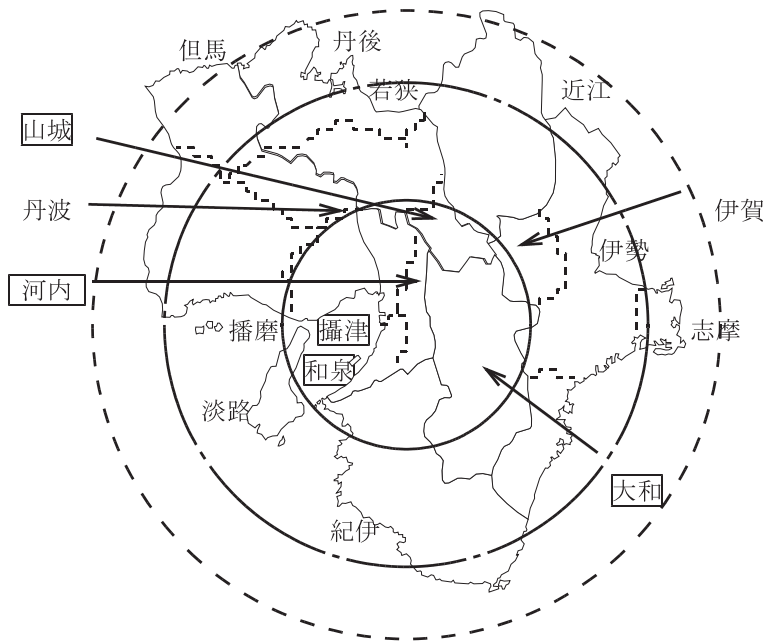
ここには八府県と十七箇国が区画されているが、このうちで現在府県境を跨いでいるのは摂津と丹波の半分が兵庫県に組み入れられているのと、北紀が三重県に組み入れられたので、和歌山県には飛び地が生じている。大和国＝奈良県、近江国＝滋賀県は、一国がそのまま一県に移行したものであり、分かりやすい。他方で兵庫県のように五箇国を一県とし、北は日本海に面し南は瀬戸内海と四国にも通ずるという多様性を見せる場合もある。

ここで一つ、以下の議論において考慮に入れるべき事情を指摘する。それは典型的に府県庁所在地において際立つのであるが、旧国境を跨いだ市町村合併が見られるという点である。古くは、神戸市が播磨国であった垂水区と西区を編入したという例を挙げることができる（旧垂水区は一九五〇年に編入、その五年後に現西区の七箇村を垂水区に統合したが、一九八二年に分区）。今世紀に入って、以下のような市町村合併があった（『最新基本地図』、括弧内は年）。

京都市（2005） 京北町
 奈良市（2005） 月ヶ瀬村、都祁村
 津市（2006） 久居市、河芸町、芸濃町、美里村、安濃町、香良洲町、一志町、白山町、美杉村
 大津市（2006） 志賀町

この中で旧国境を跨いでいるのは、京都市と京北町である。京北町は一九六五年に周山町、細野村、宇津村、山国村、黒田村及び弓削村という一町五村が合併して発足した。旧丹波国である。その後、二〇〇五年に京都市に組み入れられたのであるが、面積は市域の四分の一を占めている。素朴な疑問であるが、京北町の住人は京都市民になったからとて、京ことばに鞍替えする訳でもあるまい。ことばという文化的背景を無視したかのような拡大主義には、疑念を呈する。

ここで前稿から、近畿方言を三重の同心円で区画した地図を引用してみよう。



〈旧国名による畿内と周辺諸国〉

このように地図では現行の府県境と旧国境が錯綜して見づらいが、上掲のように旧国名を並べた方が理解が早そうである。しかし畿内－周縁－圏外という距離感を得るにはこのような地図が適している。同心円の中心は摂河泉三国の国境が交わる大和川に近い。この川は摂津と和泉の国境である。畿内一円は、ここを中心として半径は十里ほどである。周縁圏となると二十五里と二倍半ほどの距離になる。最外円は半径三十里余りで、距離は周縁圏の二割増しほどである。距離としては志摩は丹後や但馬と同程度に中心から隔たっているが、区分としては近畿方言圏内である。

地図を眺めて再認識するのは、紀伊半島の大きさである。面積で、近畿圏の南半分を占めている。紀伊国から名前が取られているのは、海岸線の半分を占めるからであろう。西側は摂津と和泉、東側は伊勢と志摩であるが、南側が全て紀州である。この半島にすっぽり納まっている内陸国が大和と河内である。

距離もさることながら、域内での行き来について考えておきたい。畿内五国は互いに境を接して隣り合う位置関係である。京には長く都が置かれ、政治経済文化全ての面において日本の中心であった。各地から用向きで上ってくる人も多かったことであろう。周縁部となると、隣り合う他国よりも畿内と行き来することの方が多かった、というような事情も考えられる。播磨を例にとると、隣の丹波とは地理的な近さから行き来など多少あったかもしれないが、近江となると途端に関連は稀薄になってしまったのではないだろうか。圏外の但馬丹後志摩となると、隣り合う但馬と丹波の繋がりこそあったであろうが、全般に畿内との距離が遠いので生活面でも不便であったと想像する。

江戸時代は交通手段が基本的に徒歩しかなかった。淀から天満の八軒屋まで淀川の上り下り、あるいは琵琶湖矢橋の渡しや兵庫の港から天保山までの渡しなどは例外的で、限られた場

所でしか見られない水運交通である。興味深いのは、これら三箇所での船旅は噺の題材になっているという点である。それぞれ『三十石夢の通い路』、『矢橋舟』、『兵庫の渡海 鯨の見入れ』として今でも高座にかかる旅ネタである。『矢橋舟』は琵琶湖内の渡し、『兵庫の渡海』は摂津内の渡しであるが『三十石』では山城から摂津へ下る船路である。三十石は七里半、兵庫から天保山までは五里であった。矢橋舟は湖上一里であるが、東海道は草津から大津へは琵琶湖に沿う道筋であるために行程は二里半になる。旅人にとっては、足を休ませながら旅程を稼ぐことができたので「板子一枚上は極楽」であった。

噺の題材という視点を採ってみると、長屋の住人であった喜六と清八、場合によって源兵衛という三人目を加えて旅に出かけるという旅ネタが一つの大きな題材供給源となっていることに気付く。東-『伊勢参宮神之賑』、西-金比羅詣り『兵庫の渡海』、北-『池田の猪買い』、南-『紀州飛脚』、異国巡り-『島巡り大人之屁』、天上界-『月宮殿星都』、海の底-『竜宮界竜都』、冥界-『地獄八景亡者戯』というように、現実世界を超越して想像を羽ばたかせているのが大きな特徴である。現実世界においてさえ旅に出ることは非日常の体験であるが、それを一挙に想像世界にまで広げているのが上方噺なのである。江戸噺には、現実世界での旅ネタそのものも少ない。ましてや、異国や異界を巡るという桁外れの跳躍は全く思いも付かなかっただろう。

以下では、畿内-周縁部-圏外という節立てをし、それぞれの方言で特徴を分析していく。

第二節 畿内方言

本節では、畿内五箇国の方言諸相を分析してみる。

平城京が置かれた大和には、南北朝の時代に南朝も都を置いた。長岡京の短い時代を経て平安京に都が移ってからは、千百年の長きに及んで帝のお膝元であり続けた。摂津は、古くは難波宮が置かれた地として早くから開かれた土地柄であった。泉州では堺が、経済力を背景として一時期自治独立を果たすなど地の利を活かしているとも言える。河内は他の四箇国全てと境を接している。以下、各方言を並べて比べる。前稿では京ことばと船場ことばを対比したが、それぞれ山城と摂津の中心となる方言である。言語学的には、長らく都が置かれていた京と「天下の台所」と称されていた大坂を括った「京阪方言」が近畿方言においても核をなし、標準無標という位置付けである。前項でも検証したように京ことばと、船場を中心とする浪速のことばは音韻や語彙などの面で相違はあるが、両者を合わせて近畿方言の標準無標として代表させているのである。

摂津

明治維新の折に廃藩置県によって、摂津国は東西に分断されてしまった。府県境は淀川の支流である神崎川から北へ延ばしたような引き方になっている。ここから東を東摂津とする。西側は更に、芦屋川と住吉川の間近辺で分け、ここから西は神戸（西摂津）、間を中摂津とする。このように細分化した理由は、東摂津が京阪方言で標準的な地位を占めるのに対して、神戸方言は以下に述べるように京阪方言とはかなりの差がある故である。中摂津は中間に位置し、緩衝地帯であるとも考えられる。一般に「阪神間」と言えばこの地を指す。更には百年は

ど前には船場から移転してきた人たちによって船場ことばが移された。住民人口という視点から考えればごく一部であろうが、阪神間と神戸方言の区画確立にどのように影響したかという定量的検証が必要であろう。

前稿では船場ことばを摂津方言の中でも標準無標で、地理的にも社会的にも中心となるというように位置づけた。山田庄一氏『京なにわ暮らし歳時記』では、船場ことばとは島之内と雑喉場と堂島から天満にかけて、大店の主が話す一種の社交用語と定義されている（第四章）。船場だけに限定してしまうと地理的にはごく狭い範囲であるが、船場周辺と広げる一方で社会階層として定義する視点が重要である。本稿でもこの定義を採用する。

神戸方言は、摂津の西半分を占めているものの、船場ことばとは異なる特徴がある。最も頻繁に指摘されるのは、「～シテイル」という相が「～シトウ」になる現象であろう。「知ッテイルカ」は船場ことばでは「知っとるか」、神戸ことばでは「知っとうか」となる。これは播磨でも共通で、これを聞くだけで神戸以西の方言であることが明らかになる。摂津の東半分に接する西宮や伊丹、尼崎では耳にすることがないように思われる。

語彙と音韻の側面で、神戸は摂津でありながら船場ことばとは全く違った特徴を示すのである。以下は『関西弁事典』からの引用である。左が神戸以西、右が阪神間である。

男・女	オトコ、オンナ	オトコ、オンナ
眼鏡、花火	メガネ、ハナビ	メガネ、ハナビ
電車、選手	デンシャ、センシュ	デンシヤ、センシユ
十、地図	ジュー、チズ	ジュー、チズ

筆者は生まれてから三十五歳まで東播磨方言域に在住していたが、神戸以西の型と完全に一致する。「眼鏡、花火、電車、選手、十、地図」は全て頭高であり、京阪方言の型を見聞きすると強烈な違和感を持ったものである。従って、この面で境界線は神戸市と芦屋市の間で引くのが妥当であろう。

『関西弁事典』では、神戸と明石の間に境界線を引いて摂津と播磨方言を分けている。他方で鏡味明克氏による区画案では、神戸から旧揖保郡と宍粟郡の東半分までを神戸播磨方言と括っており、芦屋以東は阪神方言という分類である（同事典に引用してある）。本稿では、後者の立場を採る。理由は、上掲の語彙抑揚型や「～しとう」は神戸以西に特有であって、芦屋以東には見られないこと、神戸以西は西播を除く播磨方言と共通であることである。

山城

船場ことばと共に、京ことばも前稿で論じた。洛内も船場も比較的狭い土地柄であるので、方言変種は限られる。『関西弁事典』には京ことばの中に公家、中京の商家、西陣の職人、祇園の花街という下位分類を挙げている。これらは、一定地域に特有の階層なり職種が集住しているという事情から発生したものである。どの変種も、頻用される語彙において顕著に特徴が顕在化する。洛内のすぐ北は丹波で、全く別個の方言圏である。南へ下ると宇治である。旧南桑田郡と乙訓郡は摂津と接し、和楽郡は伊賀と大和両国に境を接するという地理情勢である。綴喜郡と和楽郡を南山城、それ以外を北山城と分ける。

ここで京ことばの音韻的特徴を列挙する。まずは一音節語の母音長化で、キー（木）、メー（目）のようになる。逆に長音の短縮化があり、センセ（先生）、イコ（行こう）、ハヨ（早う）と、名詞に限らない。次にサ行転呼音で、サ行音がハ行に変わる部類である。オバ^ハハン（おばさん）、ヒチ（七、質）、布団をヒク（敷く）、ヒツレイ（失礼）、ホレカラ（それから）などである。質屋はヒチャ、七条は古い世代ではヒッチョウ（若い世代ではヒチジョウ）であった。最後にヤ行音の拗音化を挙げる。トッ^ショリ（年寄り）、オン^ミャハン（お宮さん）、ニッ^チョー（日曜）、シン^ニョル（死による）、カッ^ジャ（火事や）などである。傍点を附した促音と撥音は、拍数を保つために挿入されたものと考えられる（『関西弁事典』）。この段で挙げた音韻変化は、全て摂津方言でも同様に見られる。近畿方言全体でも普遍的と考えられる変化である。

同事典には、「京ことばと浪速ことば」という見出しの下に次のような対比が挙げられている。京／浪速の順である。

ソードスエ／ソーダッセ（そうですよ）、アツオスナー／アツオマスナー（暑いですね）、イカハル／イキハル（「行く」の尊敬語）、ドーシタン／ドナイシタン（どうしたの）、シーヒンニャテ／セーヘンネンテ（しないんだって）

浪速ことばを基準として京ことばを対比させると、両者の違いが興味深い。浪速ことばの助動詞「だす」に対して京は「どす」、本動詞の活用形が「行きはる」に対して「行かはる」、「せえへん」と「しいひん」、疑問副詞が「どない」と「どう」、というように違いが見られる。「どす」が京ことばの代表格であるかの如くに目立つのに対して、「どうしたん、しいひん」は微妙な違いであるように感じられる。

南山城に特有の語彙としては、ケツネ（狐の訛音）、コロモン（沢庵漬）が挙げられる。

大和

『関西弁事典』では、大和方言を北部と南部に二分している。南部は吉野郡天川村、上下の北山村、大塔村（現在は五條市の一部）と十津川村である。面積は大和国の三分の一にもなるが、人口は大塔村を除く四箇村で五千二百人ほどと、現行の域内人口で千分の四ほどを占めるに過ぎない。特に十津川村は、一村だけで大和国全体の六分の一という広さで、村としては全国一の面積である。一帯は標高二千米に迫る紀伊山地の中であり、鉄道は北部方言域である吉野町まで近畿日本鉄道吉野線が通っているのみである。つまり南部方言地域には鉄道網はない。

同事典によると、北部方言は京阪式であるのに対して南部は関東式で、「方言の島」になっているという。つまり、周囲は全て近畿方言圏に取り囲まれているのである。しかしながら以下は関東方言とは関わりなく、南部方言特有の事象である。ダ行鼻濁音が十津川村では〔～d〕、下北山村では〔nd〕となり、動詞の音便形「書いて、泣いて」がそれぞれ「カーテ、ナーテ」と長音化するという。また十津川村ではオクル（起きる）、シラブル（調べる）、ワラワルル（笑われる）、ミサスル（見させる）、トバルル（飛ぶことができる）というように、動詞と助動詞の二段活用が残っている。このようにざっと挙げただけでも、大和南部方言は周囲

とは隔絶されたような特徴を有している。

山城方言の項で挙げた、一拍語における母音の長化やサ行転呼音は大和方言でも同様である。しかし大きく異なるのがザ行とダ行とラ行の混交である。座敷はダシキ、風邪はカデ、雑巾はドーキン、満足はマンドクとなる。この混交は主として播磨－丹波や紀伊といった周縁部で見られるもので、畿内では大和のみであろう。

北部方言で特徴的な文法形式に、過去の推量「降ッタヤロ」と継続態「降ッタル、降ットル」、結果態「降ッタル」がある。また、使役表現にはスとヤスがある。共に未然形に接続し、五段動詞とサ変動詞にはス、それ以外にはサスを後続させる。イカス（行かせる）、ノマス（飲ませる）、ネサス（寝させる）、ミサス（見させる）、コサス（来させる）などである。一段活用動詞にヤスを後続させて、ネヤス（寝させる）、ミヤス（見させる）、コヤス・キヤス（来させる）というのは古い言い方であるという（同事典）。

南部方言は、一拍語における母音の長化がなく、断定の助動詞がジャヤダであるという点も近畿方言としては特異である。過去の推量は「降ッツロー」で、京阪式と同じである北部方言の「降ッタヤロ」とは大きく異なる。継続態は「降りヨ（一）ル」、結果態は「降ットル」と、共に北部方言とは異なっている。一段活用動詞の五段化も特徴的である。「見ラン、見リター（見たい）、見レ、見ロー」となるのである。どれも頻用度が高い基幹動詞であるだけに、短時間会話を交わすだけでも耳にする機会が多いものと思われる。

河内

河内国は北で山城と接し、南は紀州と接するというように南北に細長い地形である。西では摂津と和泉に接している。つまり、畿内の国全てと境を接している。そういう視点で眺めると、地理的に河内が畿内の中心と言うことも可能であろうが、文化的にはそれとは異なる様相を呈している。

『関西弁事典』によると河内方言の特色として、「イッコル（行きよる）、ノンモル（飲みよる）」、「ヨロガワノミル（淀川の水）、カロノウロンヤ（角の饅頭屋）」、疑問終助詞の「ケ」、ラ行の巻き舌音や談話速度の速さが挙げられている（但しこれらは嘗て近世後期から昭和初期にかけて摂津方言と共通であったと指摘されている）。「イッコル、ノンモル」は本動詞「行く、飲む」に助動詞「ヨル」が接続した際の音韻変化であるが、促音便と撥音便に後続して「ヨル」が「オル」に変化している。現代の摂津方言であれば「イッキョル、ノンミョル」となるところであろう。「ヨロガワノミル、カロノウロンヤ」においてはザ行とダ行とラ行の混交が見られる。元来は摂津方言でもこれらの特色が共通していたのであるが、この百年ほどで社会の近代化が進んで消滅したものであろう。他方で、河内地方は農村色が濃かった分これらの特徴も最近まで残っていたという可能性がある。ラ行の巻き舌音も特徴的で、聴覚的にも荒っぽいという印象を与える。

また地域差として、これらの特徴は南へ下るほど色濃く残されたという点も指摘できる。北河内は京と大坂の中間に位置しており、近代化と共に都市化が進んだ。中河内や南河内も大坂に近いという点では同様であるが、京とは離れているのが決定的な違いであろう。意識するかせざるかは別として、京すなわち雅のところ、という辺りに淵源がありそうである。生駒山系が途切れた平地は、大和盆地に続いている。今東光師の小説や、一九七十年代の流行歌にあっ

たような「河内弁」は、典型的に南河内の荒っぽい物言いを強調したような傾向があった。対称詞を「ワレ」とするのが典型的であろう。そのために河内方言全体があのように荒っぽいものという誤解が全国的に広まってしまったのであろう。方言拡散の型としては、悪しき例である。

和泉

和泉国は大和川で摂津と分かたれ、東は紀伊山地に到るまで河内と接している。南は和泉山地に隔てられて紀州である。『関西弁事典』によると、堺と高石、大津、和泉市までを泉北、岸和田以南を泉南と二分している。昭和後期——ということは、ごく最近まで——大坂市域での例で隣接する河内や和泉に波及していた動詞活用形として、「キサス（来させる）、カカヘン（書かない）、ミーヘン（見ない）」を挙げている。否定助動詞の「ヘン」に接続する本動詞の活用形二例については、京阪方言全体でこれらを本則として分析するべきであろう。

泉北と泉南の境界は山や川という自然地形で隔てられたものでないのにも拘わらず、両方言の違いは大きく、地理的な説明では及ばないという（同事典）。泉北は摂津方言に近付いて行くのに対して、泉南は険しい紀州山地で隔てられた紀州方言との類似が見られる。その類似は語彙類に留まらず、語法面にも見られる。継続態の降ッチャーラは統語分析すると降る＋テ＋アルに由来する。また、ラは自称詞に由来する終助詞ワシとチャールとの音融合でチャール＋ワシ→チャーラシ→チャーラという経緯を辿ったものであるという。これは紀州方言と共通である。終助詞の語源が自称詞であるというのは、統語範疇の飛躍或いは超越とも言えそうである。

第三節 周縁圏

周縁圏は畿内五箇国を取り巻く諸国で、西は播磨、北は若狭、東は伊勢、南は紀伊という位置関係になる。若狭と志摩を除いて、七国は畿内五国に接している（海を隔てた淡路を含める）。周縁圏相互の行き来というのは畿内との交通に比べて機会も少なかったことであろう。街道などは畿内から山陽道（西国街道）、東海道、中山道、紀州街道というように放射状に整備されていたからである。中山道と北陸道は近江国で分岐しており、これは現代にまで続く陸運事情と同じである。言語学的比較としても、各方言が京阪方言とどのように異なっているかという視点が中心であり、周縁圏方言同士の比較ということは少ない。テ敬語が、摂津や山城でのナハル圏を取り巻くように播磨や丹波に分布しているのは、例外とも言えるであろう。

淡路

淡路島は瀬戸内海に浮かぶ日本有数の大きな島で、現在の人口は約十四万人である。佐渡や壹岐、隠岐など大きな離島は淡路と同じように独立した藩として認められていたのである。明治維新までは阿波藩の支配下であり、地理的にも政治的にも四国との結びつきが強かった。そもそも淡路という名は「阿波への道」という意であるから、人形浄瑠璃が盛んな土地柄というような共通点があることも頷ける。

方言区分としては北中南の三分割がなされるが、これは現行行政区分である淡路・洲本・南

淡路と一致する。今世紀に入る前後に市町村合併が進んだが、淡路島の場合は偶然であるとしても方言境界と行政区分が一致したのである。ザ行とダ行とラ行の混交は、対岸にある紀州方言の影響と言われる。

語法面では、断定の助動詞が「～ダ」である点が特筆される。近畿圏全体では「～ヤ」が基本である。推量の意味では「～ダー、～ダレ（北部）、～ダロ（南部）」になるという（『関西弁事典』）。助詞の「が、は」は名詞と融合して「蛸が、蛸は、鷹が、鷹は」は全て「タカー」となる。こうなると、格助詞としての「が」と係助詞としての「は」は区別できない。そもそも単独名詞としての「蛸、鷹」が音声上は融合してしまい、区別ができない。また「～してください」が「～テッカ」で、例えば「教えテッカ」であるという。京阪式の敬語助動詞「なはる、おます」という文末形で共通であるが、全体としては敬語は少ないという（同事典）。

播磨

周縁圏で最も西に位置するのが播磨国である。西隣は備前や美作であり、因幡国とも境を接している。但馬とも長い国境を共有するが、同国は中国方言圏である。近畿方言と中国方言との方言差は大きい。播磨は両方言境界の最前線に位置する。京を起点とする西国街道が播磨灘沿いに東西に通じており、海運でも要地である。

基本的に京阪方言と同じであるが、西播磨と東播磨で差異が認められる。東西の境は姫路市内で分かたれるようである。『関西弁事典』によると西播磨方言は「垂井式アクセント」体系で、「その船が見える」は全高、「無い」は高低となっている。京阪式では「その船が見える」では「その」と「が」と「る」が高で他は低、「無い」は低高で筆者（東播磨方言域で生育）の内省とも一致する。「その船が見える」が全高というのは、隣接する地で三十五年間生活していたとは雖も、非常に奇異に感ぜられる。「眼鏡、花火、電車、電池、選手、十、地図」は全て頭高であり神戸方言とも共通であるが、「猫」は頭低で、これが神戸市のどこまで同様であるかは積年の課題である。西播磨方言の特徴としてはガ行鼻濁音の劣勢、東播磨方言ではザ行－ダ行－ラ行の混交が挙げられている。

言い回しとして「べっちょない」（「べっちょ」は別条）、「ごおわく」（腹立たしい、「業を煮やす」の業であろう）、「せんどぶり」（久しぶり）、「せがない」（張り合いがない）、「ずつない」（食べ過ぎて苦しい）、「だっちもない」（しょうもないの意、ダッチは埒からの変化）、「しょーとろしい」（興味はあるが高価すぎて手が出ない）などが際立つ。「しょーとろしい」のみは他への言い換えが不可能である。例えば店頭である品が目に残ったが、高価すぎて手が出ない、というような場面である。「だっちもない」は「埒が開かぬ」からの転で、物に値打ちがないことを言う。どれもが日常感が溢れる場面で頻用される部類の言い回しである。

以下のようなテ敬語は、京阪方言的な面と中国方言的要素を併せ持っている同事典は指摘する。

「先生今日来てか」「じき来てや、昨日も来た一ったで」

後者の「来た一った」は京阪式では「来てはった」であろう。カ行変格動詞「来る」の過去形「来た」にテ敬語が加わって、複雑な音韻変化過程が作用した結果である。

丹波

丹波は内陸国で、周囲は播磨－但馬－丹後－近江－山城－摂津に囲まれている。地理的にも言語的にも、西半分は摂津との関係が深く、東半分は山城との結びつきが強いと言える。『関西弁事典』によると西半分は旧氷上郡（丹波市）と多紀郡（篠山市）、東半分は北部（福知山、綾部）と南部（南丹市や亀岡市など）というように四分割できるという。東西で大きく二分した場合は、西では過去の否定形が「～ヘンダ」、東では「～ヘナンダ」である。東側は更に、福知山と綾部で「来ない、来なかった」が「コン、コナンダ」、南丹や亀岡では「キーヒン、キヤヘンカッタ／キーヒンカッタ」という差が生じる。「キーヒン」は山城方言で「しなかった」が「シーヒン」となるのと共通点があると言える。

敬語使用はやや複雑で、西部である篠山と東部の福知山や綾部でテ敬語が見られるのは播磨方言と共通である。しかしそれ以外の地域では摂津方言と同じハル敬語に加えて、過去形にタッタやチャッタがあるという（同事典）。京阪式で「行きはった、行かはった」が丹波では「行ッチャッタ」となる。更にヨルが加わると、「先生あっちゃこっちゃ行ッキャッキョッターッタ」というように複雑になる。行き＋歩き＋ヨル＋テ＋ヤッタと複合すると、早口ことばのような活用形になるのである。

アクセント体系は、東西よりも南北で対立を示す。南部は京阪式で北部は垂井式という対立がある。南部は摂津や山城に隣接しているので、アクセントも地続きであると考えられる。篠山では京阪式で「雨、秋」が単独では頭低で二音節目が高→低となる記号「\」が附され、助詞「が」を伴うと二音節目は高となっている（同事典）。音節内で高→低と音高が推移すると、必然的に一拍半以上の長さになる。京阪式では低－高と二音節二拍である。助詞「が」が後続すると一拍になるので、複雑な音高推移はなく単に高となってアクセント核が付与されている。北の丹波市は垂井式で、単独でも「が」後続でも全て頭高になる。

若狭

若狭と越前の国境は、敦賀と美浜の間に位置する。若狭は丹波と地続きであり、京までは鯖街道を通じて行き来が盛んであった。但し鯖街道は近江路によって琵琶湖の水運を利用したことであろう。小浜は京の真北で直線距離では十里ほどであるが、間には険しい丹波高地が立ちわだかっている。陸路としては東に抜けて近江に入るか、西に舞鶴に向かうのが順当であろう。嶺南方言と括ると、越前である敦賀が含まれるので、若狭方言とは区別が必要である。越前では嶺南－嶺北と京から離れるに連れて、近畿圏外という色合いが強まってくる。若狭までを近畿方言圏内とみなすのが通説のようである。

東部の美浜町や若狭町では準垂井式で、小浜以西は垂井式アクセントである。また文節の切れ目で揺れる音調は北陸方言に顕著であるが、若狭でも聞かれるという（『関西弁事典』）。語法では、カカン（書かない）、アメヤ（雨だ）、コータ（買った）、アコーナル（赤くなる）というように、近畿方言との共通点が多い。若い世代で「来ない」をコーヘンとするように、近畿圏の若年層と同じ変化を起こしつつあるようである。動詞相の「～している」が～トルとなって、中国方言に近い面も見られる。敬語体系は些か複雑である。高齢層では周辺部に古形の～ツシャル、～ンスが残っているほか、全域で～ナサル、ナル、小浜中心部と旧上中町や高浜町には～テヤが分布するという（同事典）。

近江

近江一国は、琵琶湖が面積で六分の一を占める。街道筋は、東海道と中山道と北陸道が分岐する要衝の地である。京から見れば、東国に下るにはこの地を避けて通ることはできないという地理関係である。方言区分も、琵琶湖を基準として東西南北の四つに分ける。湖北は伊香から浅井長浜を経て坂田までで、残る東西南の三方言とは大きく異なる。北陸道を辿れば越前に抜け、中山道で美濃に続くという地理的な要素から、近畿方言よりも隣接する越前や美濃のことばと共通点を持っていたとしても不思議ではない。京から大津に抜けるには、山科を通して追分の峠越えをするだけで、呆気ないほどの近さである。この近辺は湖南であり、比良山系麓の湖西と八日市など湖東と共に近江方言の中核をなしている。

湖南方言の特徴として挙げられているのが、イカヘン（行かない）、ミーヒン（見ない）というような否定形で、これらは隣接する京ことばと同形である（『関西弁事典』）。従来は湖南方言という区画内であった甲賀は、イカヒン、ミヤヒンというような湖東方言との共通点や、隣接する伊賀方言のミサッサル（ご覧になる）という敬語方式やイコニー（行こうね）における終助詞ニーなどの影響が指摘されている。

湖東方言は、「行く、見る」の敬語形イカ（一）ル、ミヤ（一）ルが、湖東北部でイカンス、ミヤンスとなる。後者は湖北方言と共通であるという（同事典）。「来る」に助動詞ヤンスを後続した場合、キヤンス、キャンズ、コヤンス、ゴンズなど地域によって活用形が異なる。他には「危ないホン」（危ないよ）という終助詞ホン、「ほんでナーシ」（それでね）という間投助詞ナーシ、「そこに行くトサイガ」（行ったら）「行くサケ／ハケ／デ」（行くから）というような接続助詞という部類が見られる。「一緒に行こマイ」という勧誘表現では、終助詞マイが隣接する美濃方言の影響であると指摘されている（同事典）。

湖西方言の特徴ではシェンシェー（先生）やジェーキン（税金）というようにセ・ゼが口蓋化してシェ・ジェになるというが、若い世代では最早聞かれないであろう。動詞の否定形式は（ヤ）セン、接続助詞ハケ／サケ、敬語（ヤ）ンスという辺りが湖北方言と共通である（同事典）。

このように近江国全体では、琵琶湖を取り巻いて東西南北という四方言が有機的に結びついている様子が窺える。湖北を除いては京ことばの影響が強いという点も共通しているであろう。

伊賀

伊賀国は、周囲を山城－近江－伊勢－大和に囲まれた内陸地である。山城と大和は畿内であるから、言語的にも畿内の言葉遣いに近いと考えられる。面積としては志摩よりは大きいが和泉国と同程度であって、他の諸国よりは小さい。小さいながらも、北半分は近江を介して京に心理的に近く、南の名張は大和を介して難波と繋がりが強いという傾向が観察される。

伊賀方言では連母音の融合現象が見られ、ダエコ（大根）、アカエ（赤い）となる。語彙では、メボ（麦粒腫、京阪ではメバチコ）、イコニ（行こうよ）、机をツル（運ぶ）など伊勢方言を通して東海方言的要素も入っている。他方ではカエルサカイ（帰るから）、シアサッテ（明後日の翌日）、雨がフッテル（降っている）など京阪方言の言い様である。そして「帰ってクレル」は授受表現ではなく敬語で「お帰りになる」というのは伊賀方言特有である。また「行

ってだーこ」が「行ってください」という意になるのも伊賀特有である。

伊勢と志摩

伊勢は南北に細長い地形である。北は中部圏の美濃と尾張に接し、西では近畿圏の近江と伊賀と大和に接し、南は紀伊である。志摩は志摩半島の先端を占めるだけというようになっており、面積としては畿内と周縁圏を合わせても最も小さい。方言区分としては、度会郡を南北に二分割して以北を北伊勢方言とし、同郡の南半分と志摩を一つとして南伊勢・志摩方言と区分する(『関西弁事典』)。つまり、志摩方言は南伊勢方言と同一の区分となっている。これは面積が小さいという事実からも必然的であったかもしれないが、三方を海に囲まれて残りは伊勢と地続きであるという地理的情勢からの結果であろう。東西アクセント型の境界は、木曾三川で最も西を流れる揖斐川である。ここから西が、近畿方言圏である京阪式アクセント型を示すのである。

語彙面で、北伊勢は地続きである尾張方言の影響を受けている例がある。コーライ(玉蜀黍)やメンボ(麦粒腫、京阪ではメバチコ)である。コーライの語源は「高麗」であろうか。これらは中伊勢以南ではナンバ、メボである。京阪式のオーキニがオーキンナ、ヨーオコシがヨーオイナシテと変化する場合もある。語彙の次元に留まらず、日常会話の語法でも京阪式と共通点が多いと言えよう。

志摩方言の布施田には、動詞の音便形で特徴的な活用が見られる。マ行五段活用で母音が「ウ」ならば撥音便で「ツンダ、クンダ(積む、汲むの過去形)」と京阪式と同様である。ところが「ウ」以外では「ノーダ、コーダ(飲む、嘔むの過去形)」というようにウ音便であるという。京阪式ではノンダ、カンダと撥音便であるところが、特異な活用形を示している。これは大和南部の十津川方言や九州方言と共通であり、室町時代の口語形式とも一致する古形である(同事典)。

文法にも京阪式と名古屋式の平行が見られる。京阪式の否定のヘン、敬語のナハル、原因や理由を表すサカイやヨッテと、名古屋式のセン、敬語のイカッセル(いらっしゃる)、ミエル(お越しになる)が併用される。伊勢方言全体として、一段活用やサ行変格・カ行変格活用動詞の否定にはヤンを用いる。ミヤン(見ない)、シヤン(しない)、キヤン(来ない)という具合である。これは畿内中心部の規範的な語法とは一致しない。否定の過去形は、イカンダ(京阪ではイカナンダ)、ミヤンダ(ミナンダ)というように京阪式のナンダガンダとなる。ミヤンダは現在形の否定ミヤンからの派生と考えれば筋道が立てやすい。しかし近畿方言としては規範的語法から外れている。

紀伊

紀州は、紀伊半島の半分ほどを占める。西は泉州との境から、東は伊勢との境になる尾鷲まで長い海岸線に沿って延びていたのである。河内や大和とは陸地だけで境を接している。海岸線の延長は四囲が海である淡路よりも長く、圏内で最長である。このように細長い地勢であるから、方言区分も多様である。大きく紀北－紀中－紀南と分けるのが一般的であろうが、紀南は更に西牟婁－東牟婁－南牟婁－北牟婁というように区分するのが現行の行政区域の境界とも一致している。今の県境は東牟婁と南牟婁の間にあり、新宮は東牟婁の東端で熊野川を渡れば

南牟婁の地である。紀北は畿内と接しているが、紀中－紀南と南下するに連れて地理的また心理的な距離も増大することであろう。紀中と紀南では、海沿いでない地域は奥地方言と区分する。

アクセント型に関して、方言圏論の観点からも非常に興味深い言及がある（同事典）。中紀方言の北端に位置する田辺で、次のような型が見られるという。

サガル（サガル） アカイ（赤い）

京阪式であれば、サガル、アカイとなるところである。この田辺型が龍神村を経て、京阪式に変化していったというのである。細い線が繋がっていけば、方言圏論を裏打ちするような材料に変容するであろう。

音韻面では、長母音の短呼と短母音の長化が混在している。前者はシンボ（辛抱）やサト（砂糖）であり、後者はニール（煮る）やターカイ（高い）である。前者は、船場ことばでも「シンボしといと」というように耳にすることもあるので、一定程度の普遍性が認められよう。しかし後者は紀伊方言に特有と思われる。促音節は、ミトモナイ（みっともない）では脱落、オッサエル（押さえる）では付加と、これも予測不能である。ザ行－ダ行－ラ行の混交も顕著で、雑巾はドーキン、「まだ」がマラになる。母音交替はマツト（もっと）、ハソム（挟む）、タノキ（狸）、ヨムギ（蓬）において見られるが、交替の方向は一定ではない（『関西弁事典』）。

助詞類の特徴は、主格助詞で雨ン（雨が）、勧誘を表す「連れもって行こう」（一緒に行こう）のラ、比較を表すソレシカ（それより）、否定的な限定の一本ハカナイ（しかない）が表格である。丁寧な態度を表す終助詞ノシは、紀中方言に特有である。

紀伊方言における動詞活用的一大特徴であると考えられるのが、母音語幹動詞に接続する否定辞のヤンである。シヤン、来ヤン、見ヤン、起キヤン、寝ヤン、食べヤンなどで、これらは従来の方言伝播とは逆方向に、畿内への影響が見られるという（同事典）。状況可能形式で二段活用するヨムル（読める）、キルル（着られる）は古風であるが、奥地方言に僅かに残るのみである。

第四節 近畿方言圏外

最後に採り上げるのは、地理的に近畿圏内の二府四県内でありながら、方言区分では近畿方言と分類されない丹後と但馬である。両国は日本海に面し、隣り合っている。西隣は中国方言圏の因幡であるが、南は播磨と丹波で東は若狭というように近畿方言周縁圏と接している。但馬と丹後の両方言は近畿方言的ではなしに、中国方言的な要素が強いと見られている。近畿方言圏と中国方言圏を分かつ最大の基準は、アクセント型である。近畿方言圏は京阪型を基準として、その変種であることが基本要件である。中国方言圏は首都圏型であって、京阪型と交わらないような変異を示す。また首都圏型ではない南但馬方言は、垂井式アクセントという、輪をかけて耳に馴染みがないような抑揚を具現化させる。その次には母音融合というような音韻変化によって、近畿圏方言と聞いた印象が全く異なる話し方となる。

但馬

但馬は北が日本海で、周囲は因幡と播磨、丹波、丹後に囲まれている。三方を山に囲まれており、特に南西部の水ノ山などが高峻である。海岸線も切り立った岩場が多い。方言区画としては、日本海に面した旧美方・城崎・出石郡を北、養父郡と朝来郡を南と二分割するのが定説であろう。

近畿方言との隔たりが最も大きいと考えられるのが、アクセント型である。北但馬は首都圏式、南但馬は垂井式である。

浜坂、豊岡	$\overline{\text{フネ}}$	$\overline{\text{このフネ}}$	$\overline{\text{フネが見える}}$
垂井式	フネ	このフネ	フネが見える

首都圏と同じような抑揚は耳に馴染みもあるが、垂井式というのは初めて接したとすれば基準をどこに置くべきか戸惑いを覚えるような感覚である。京阪式とも首都圏式とも全く異なる体系のように聞こえる。「フネが見える」では名詞－格助詞－動詞という統語構造になっているが、六音節を通して全高となっているので、どこで語句の切れ目が入るのか理解に戸惑うのである。また文末の終助詞ネーが下降＋上昇という複雑な音調になるのは、北陸の「うねり音調」と呼ばれるものである（『関西弁事典』）。

語彙では、瀬戸物をカラツモノと呼ぶのが日本海特有であると指摘されている。瀬戸内では瀬戸物として流通しているのであるから、九州の地名で呼ばれるのは北前船で運ばれていた名残であろう。カラツモノは淡路でもそう呼ばれている。

断定の助動詞はダで、「今日は、エー天気ダ」などとなる。これも首都圏方言と同様で、京阪式のヤとは異なる。敬語はハル、ナハルで、この点は京阪式である。

丹後

丹後も日本海に面して、周囲は但馬と丹波と若狭に境を接している。海岸線は切り立った岩場で、舞鶴のような良港や天橋立という景観地を擁している。

丹後方言を中国方言圏と分類するのは、京阪式ではなく首都圏式のアクセント型であることが決め手であろう。第二の音韻的特徴として、連母音の融合を挙げることができる。アイとアエはヤー、オイはエー、ウイはイーとなる。アキヤー（赤い）、ナミヤー（名前）、シレー（白い）、ワリー（悪い）といった具合である。奥丹後西北部（久美浜）ではワ行五段活用 of 過去形とテ形がそれぞれカータ（買った）、カーテ（買って）、サ行五段動詞のイ音便形がハナエタ（話した）となる。これは西隣の但馬と共通であるという（『関西弁事典』）。次に、五段動詞以外の意志形がオキョー（起きよう）、アキョー（開けよう）というようになる。母音融合によって複数の母音素が長音化によって一つになり、地域外の聞き手にとっては聞き慣れない音型になる。その他音韻的特徴として、語頭以外のガ行音が非鼻濁音になることが指摘されているが、これは近畿方言全体において若年層に見られる共通点である。

語彙では、シャッテモ（ぜひとも、どうしても）、イカメー（羨ましい）、ホテ（脇、傍、側）などが固有である。「シャッテモ」は京阪方言「さ（っ）ても」との関連が考えられるが、追加考証が必要である。

語法面では、ナ行変格活用「死ぬる」の保存、形容詞の仮定形タカケリヤ、タカカロー(ガ)、原因や理由を表す接続助詞デがある。敬語体系はナ(一)ルが特徴的である。行きナ(一)ルというようになる。

第五節 結び

ここまで、方言圏論に立脚して近畿方言の諸相を論じてきた。畿内－周縁部－圏外という三重の同心円で区画される地理的状况は、地図によって視覚的に表示することができた。明治維新後の府県境よりも、旧国名で区画されている方が方言差を論じるには好都合であった。通時的には、明治維新後の百五十年ほどに経た変化よりも、それ以前に形成されていた方言圏が強固であったと言えよう。区分としても、二府五県なり六県(福井を含めた場合)というのは大まかに過ぎる。同じ府県内でも方言差が大きすぎる。旧国名では十七箇国であり、中分類としては妥当な数である。これ以上に細分化するとなると、各国を二分するなり三分するなりと段階を踏まねばならぬ。本稿においては和と近江は一国一県であったので、下位分類によって分析した。

細かく考察すると、但馬と丹後は畿内から比較的に近いのに中国方言圏であるのに対して、遠く離れている志摩が周縁圏であるというような「矛盾」するような場合も見られる。これは畿内からの距離という単純な要素だけではなく、間を隔てる山や川あるいは交易の必要性や頻度というように多様な尺度によって左右されると考えられる故である。

近畿方言圏であるか否かという最大の基準は、アクセント型であった。一千年以上の間、京に都が置かれていた時代を通して醸成された京ことばと、天下の台所であった船場を中心として形成された船場ことばによって、現代における京阪方言の基礎が築かれたと言えよう。その規範は語彙における抑揚型であり、西播磨や南但馬に見られる垂井式は畿内型とは直接に接していない。必ず周縁圏という緩衝地帯を挟んでいたのである。

前稿で見たような京ことばと船場ことばの語用論的な側面は、外に住まう者には通じにくい、武芸の間合いというような様相を呈していた。本稿で見てきたような方言差は、もっと皮相の次元であるとも見える語彙の抑揚を基準としたのである。

本稿で前提とした方言圏論は、近畿圏においては京阪方言、特に船場ことばと京ことばが規範として機能しているという事実を再確認する結果となった。畿内においても和、河内、和泉では京阪方言と少し異なる要素が見られる。播磨や丹波や近江など周縁圏でも京阪方言との違いがあるという点では、相対的な違いである。そして周縁部では常に畿内との距離感が意識されながら独自の方言が形成されていったという経緯が観察された。

前世紀末から今世紀にかけて行われた市町村合併について触れておきたい。合併前は三千以上あった地方自治体の数が、合併によって千七百二十七と半減に近い。日本全体として人口減という状況があり、近隣自治体を統合することによって合理化を目指すという意図があったのであろう。しかし反面で自治体としての纏まりに欠け、広すぎて地域事情に応じた行政ができないなど改善点も出現しているのではないだろうか。全国規模での例で見ると、岐阜県高山市のように香川県や大阪府より広いというような極端な事例もある。近畿圏では、丹波国西半分が旧氷上郡→丹波市、旧多紀郡→篠山市というように僅か二市になってしまった。郡名も、旧

町名も目にする機会は激減した。このように、半ば強引とも思われる市町村合併によって失われるものも多い。方言学では、これまでに蓄積されてきた地名との齟齬が生ずるといような混乱も想定される。

参考文献

- 泉文明（2012）『京ことばとその周辺』京都：晃洋書房。
- 稲垣史生（編、2007）『三田村鳶魚 江戸生活事典』（新装版）東京：青蛙房。
- 井上章一（2015）『京どぎらい』東京：朝日新聞出版。
- 井上章一（2018）『大阪的』東京：幻冬舎。
- 大淵幸治（2022）『本当は怖い京ことば』名古屋：リベラル社。
- 桂米朝（1985）『続・上方落語ノート』東京：青蛙房。
- 桂米朝（1991）『三集・上方落語ノート』東京：青蛙房。
- 桂米朝（2013、2014）『米朝落語全集』全八巻 増補改訂版。大阪：創元社。
- 角岡賢一（2019）「日本語尊大表現の語用論的分析」『龍谷大学グローバル教育推進センター研究年報』第28巻。pp.3-22。
- 角岡賢一（2020）「待遇表現としての尊大語と卑罵語」米倉よう子、他（編）所収。
- 角岡賢一（2021）『上方落語に見られる待遇表現』東京：くろしお出版。
- 菊地康人（1997）『敬語』東京：講談社。
- 真田信治（監修、2018）『関西弁事典』東京：ひつじ書房。
- 釈徹宗（2010）『おてらくご 落語の中の浄土真宗』京都：本願寺出版社。
- 陣内秀信（2023）「都市空間のなかの長屋」田中優子（2023）所収。
- 関山和夫（1992）『落語名人伝』東京：白水社。
- 高島幸次（2018）『上方落語史観』大阪：一四〇 B。
- 田中優子（編著、2023）『落語がつくる〈江戸東京〉』東京：岩波書店。
- 田中優子（2023）「「長屋」という思想」上掲書所収。
- 帝国書院（2022）『最新基本地図』四七訂版。東京：帝国書院。
- 秦恒平（2012）『京のわる口』東京：平凡社。
- 前川佳子（2016）『船場大阪を語りつぐ』大阪：和泉書院。
- 前田勇（1966）『上方落語の歴史』改訂増補版。大阪：杉本書店。
- 牧村史陽（1984）『大阪ことば事典』東京：講談社。
- 三島佑一（2016）『船場道修町 薬・商い・学の町』大阪：和泉書院。
- 山田庄一（2021）『京なにわ暮らし歳時記』東京：岩波書店。